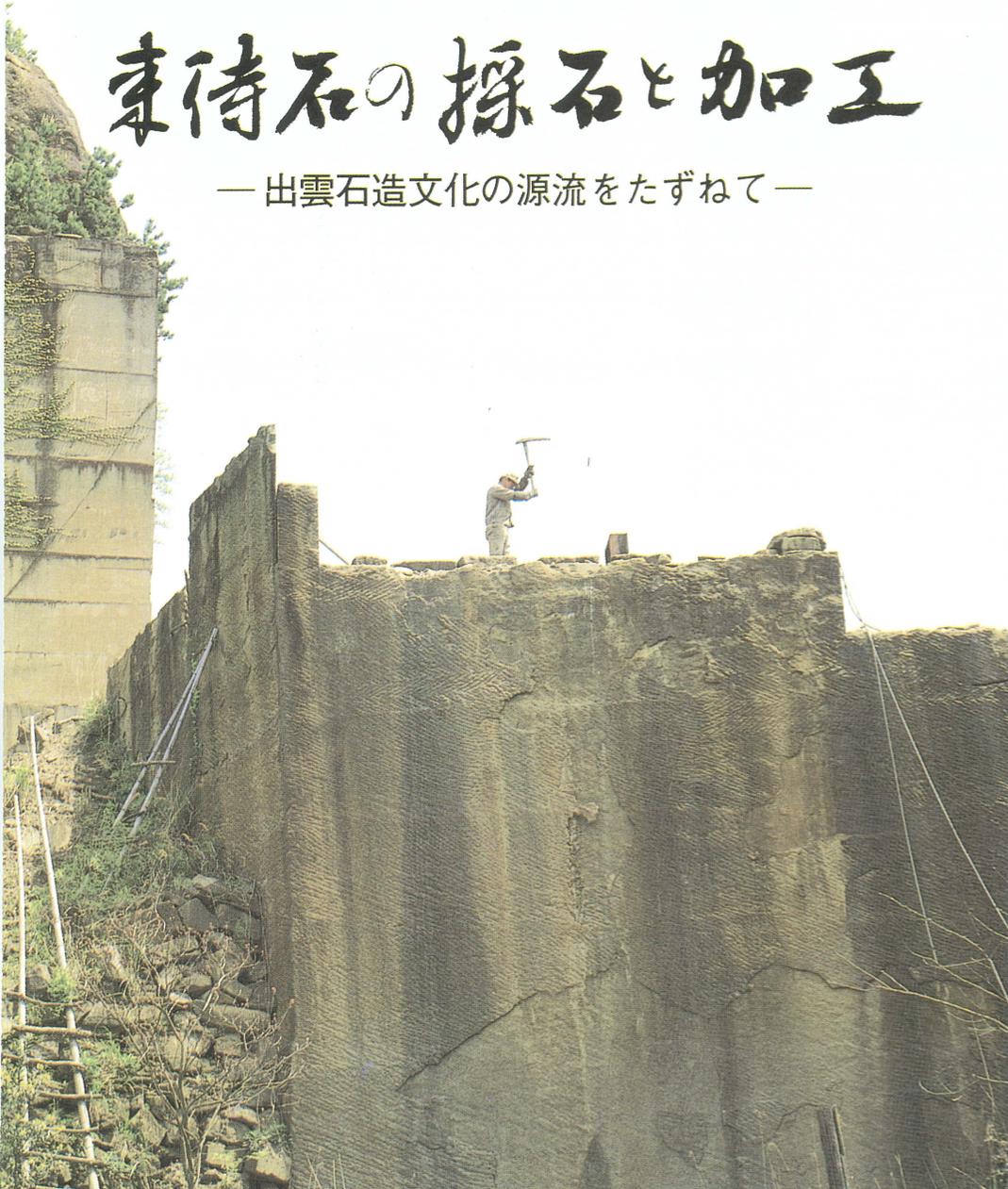


宍道町ふるさと文庫3

東待石の採石と加工

— 出雲石造文化の源流をたずねて —



発刊にあたって

宍道湖来待地区を中心として東西約10km、幅1～2 kmに広がる砂岩層を私たちは来待石きまちしと呼んでいます。

来待石は採石・加工が容易で豊富に産出することから、古くから良質の石材として利用されてきました。特に江戸時代えどには他藩への移出を制約されたため「御止石おとめいし」と呼ばれるのですが、城下町松江や周辺地域では幅広く重用ちようようされています。

古い寺社を散策し、苔むした来待石きまちしの唐獅子からじしや灯籠とうろうなどを多く見かけるにつけ、出雲石造文化せきぞうぶんかにはたした来待石の役割の大きさに改めて驚かれる方も多いのではないのでしょうか。

今回のふるさと文庫は「来待石の採石と加工」と題して、製品を支えている技術を中心に紹介しましたが、本書によって来待石の石造文化、ひいては出雲の石造文化がより身近に感じられますようお願いいたします。

目 次

ページ

1. 来待石の採石と加工の歴史	
1) 原始・古代の採石と加工	1
2) 中世の採石と加工	2
3) 近世の採石と加工	2
4) 明治・大正の採石と加工	3
5) 昭和の採石と加工	4
2. 採石の技術と道具(機械化以前)	
1) 吹き場(鍛冶場)しごと	6
2) キリヌキ	8
3) イシアゲ	10
4) イシワリ	11
5) キリイシ	13
3. 原石運搬の技術と道具(機械化以前)	15
4. 加工の技術と道具(機械化以前)	
1) 来待石の加工	16
2) 春日灯ろうの製作工程	18
3) 灯ろう作りに使う加工具	23

5. 来待石の文化	ページ
1) 殿様墓宝篋印塔	25
2) 尼子清定・経久宝篋印塔	26
3) 堀尾吉晴五輪塔	26
4) 青柳楼の大灯籠	27
5) 袖師ヶ浦の地藏さん	27
6) 出雲唐獅子	28
7) 木幡山荘眼鏡橋	28
6. 地質からみた来待石	29
7. お わ り に	30
8. 資 料 編	
資料1. 吹き場の道具	31
資料2. 採石場の道具(1)	32
資料3. 採石場の道具(2)	34
資料4. 墨つけ(線引き)と運搬の道具	35
資料5. 加工の道具(1)	36
資料6. 加工の道具(2)	37
資料7. 特殊な工具の説明	38
資料8. 江戸時代の石工資料	39

ページ

資料9. 松江藩が移出入を禁じた商品	40
資料10. 宍道町収蔵 採石加工具一覧	42

(表紙の写真は宍道町鏡地区、弘長寺地区境の来待石採石場)

1. 来待石の採石と加工の歴史

来待石は軟質で採石、加工が容易であるために、古くから石材として利用されてきました。ここでは、来待地区を中心に来待石の採石と加工の歴史をみてみましょう。

1) 原始・古代の採石と加工

来待石がいつ頃から使われるようになったのか、それはわかりません。少なくとも1400～1500年ぐらい前には利用されていたようです。

宍道町大字東来待字鏡^{ひがしまち かがみ}にある鏡北廻古墳^{かがみきたごこふん}は6世紀の後半に造られた古墳です。その石室は来待石を切り出し、加工具で形を整えてから組み立ててありました。そして内部には加工技術の高さを示す「^{かんぬき}++」状の浮き彫りがきれいに残っていました。

宍道町にかぎらず、宍道湖周辺には来待石で造られた古墳がいくつもありますので、来待石の利用の古さと広さを今に伝えています。



写真1. 鏡北廻古墳の正面

2) 中世の採石と加工

来待石の利用は大変古く、出雲の石造文化を形作った重要な石材なのですが、残念なことに風化が早く、原形をとどめている作品はあまり多くありません。しかし、硬質の石（花崗岩など）の加工が容易にできなかった時代には軟質できめの細



写真2. 伝大野次郎左衛門墓

かい来待石は石塔、石碑、建材に大変重用されたようです。

宍道町大字西来待字大野にある来待石製の^{おののじろうさ}大五輪塔（伝大野二郎左衛門墓）は鎌倉時代から室町時代にかけての製作と考えられています。

また^{あまこきよさだ}尼子清定、^{あまこつねひさ}尼子経久、^{ほりおよしはる}堀尾吉晴、^{ほりおただはる}堀尾忠晴は室町時代の末ごろから江戸時代初期にかけての^{いずものくに}出雲国の領主ですが、いずれの墓も来待石を利用しています。（本文「来待石の文化」参照）

3) 近世の採石と加工

江戸時代になると石の採石・加工業者は^{まつえはん}松江藩の許可を必要としたようです。そのために石工職人は藩の許可を得て「^{げんせき}原石の切り出し」を専門的におこなうか、「^{いしや}石屋」として松江城下に移らねばなりません

んでした。

この藩政時代、来待石は他藩へ無許可で移出することを禁じられたために「御止石」の別名を残すほど珍重ちんちようされました。しかし、来待地区の人々にとっては自ら加工して利用できる便利な石ではなかったようです。(本文「資料編8. 9」参照)

4) 明治・大正たいしょうの採石と加工

明治4年の廃藩置県はいはんちけん後は藩の禁制きんせいもとけ、「採石」と「加工」がだれにでもできるようになりました。しかし、松江の加工業者は高度な技術が広まるのを恐れ、来待地区の人々に加工技術をなかなか教えなかったといえます。

石の原産地にもかかわらず、高度な加工と技術は松江の業者たよに頼らねばなりませんので、いぜん来待地区では石を切り出すことに専念せんねんせざるをえませんでした。

明治44年に当時の来待村村長であった武田来次郎たけだらいじろうさんは「切石業者」きりいしの利益をはかるために山陰道産株式会社と特約して、来待石販売組合はんぱいぐみあいを設立し、販路を広めます。

セメント・レンガが普及しない時代の来待石は採石が容易で値段も安く、耐火性たいかせいがあることから建築、土木用の良材として用いられました。特に国をあげての殖産興業政策しよくさんこうぎようせいさくの進む明治、大正の盛況期せいきようきには、東来待、西来待、白石はくいしにわたって「切石業者」の数も多く、石材、石粉（石見瓦の釉薬）の生産高は相当なものだったといえます。

5) 昭和の採石と加工

大正末期になってから技術の入手が若干早かった境港の業者が来待地区に来て石材加工場を開業したため、加工職人の出入りもさかんになってきました。これにより来待地区でも加工を専業とする人がポツポツ出始めたのですが、その数は決して多いものではありませんでした。

ところが建築用材としてセメントなどが普及するようになると「石切」に頼る来待地区の人々は苦しい立場に追い込まれていったのです。そして、来待石を加工製品として出荷する「地元加工」の必要が叫ばれるようになってきました。

このような中で、来待地区の人々に加工技術を直接伝えた一人が新出九一郎さんです。

新出さんは庄原（斐川町）に生まれ、横浜（松江）に住んで技術を身につけます。昭和の始め頃から来待に招かれ、戦後になると自ら加工技術を身につけようとする家々に逗留して、加工技術を伝えました。

藤原良雄さん、土江弘悦さん、土江一三さん、勝部清儀さんなどは直に技術を習得されますが、これらの方々がその後の来待石製品の普及に深くかかわっていかれます。



写真3. 新出九一郎氏遺作

昭和28年に松江石材加工振興会（現松江石灯ろう協同組合）が誕生し、その成果がめざましかったことから、昭和31年4月に来待石加工組合（現来待石灯ろう協同組合）が5業者によって結成されました。

建材としての需用は減りつつも、経済成長の波と松江、来待の業者による積極的PR活動によって来待石製品、特に石灯ろうの生産は急激な伸びをみせるようになり、それと同時に量産体制をとるために、従来の手作業から採石、加工用具の機械化が求められるようになりました。

採石技術の機械化は、昭和40年代に栃木県の大谷採石場（宇都宮市大谷町）などからの技術導入によっておこなわれる一方、加工技術の機械化も昭和40年代から徐々におこなわれてきます。

昭和51年6月、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」にもとづき、出雲石灯ろうは伝統的工芸品として指定を受けます。この指定は来待地区の業者が中心となっておこなったもので、その後の来待石製品の販路拡大に大いに役立ちました。

国道脇に並ぶ製品群は出雲路の新しい風物ともいわれます。

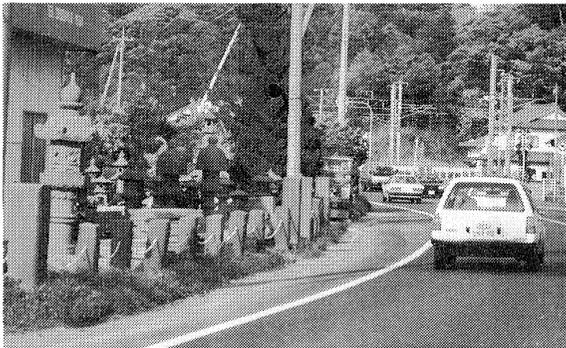


写真4. 国道9号線脇の来待石燈ろう

2. 採石の技術と道具(機械化以前)

来待石の採石は、昭和40年頃に^{おおや}大谷採石場(栃木県宇都宮市大谷町)より採石機が導入されたのをきっかけに、徐々に機械化されていきましたが、それ以前は全て手作業によるものでした。

ところで、来待石が^{ろしゅつ}露出している山中を歩くと、^{たまishi}玉石と呼ばれる来待石の^{せっかい}石塊がよくみられます。中世以前の技術の未熟な時代にはこのような石を割ったり、切ったりして利用していたのでしょう。

その後、石山を下方に掘り下げていく「キリヌキ技法」が開発されます。この技法がいつの時代からおこなわれたかはわかりませんが、昭和40年代に採石の機械化がなされるまで続けられていました。ただ、この技法も^{ろてん}露天の石面のみを切り抜く時代から、表土を取り払い全山を切り抜く大がかりな採石がおこなわれるようになるまで、若干の時間の経過と技術の進展があったと考えられます。

ここでは、機械化される以前の採石技術と道具を順に追って紹介しますが、この内容は手作業による採石に従事された方々の体験談をもとにしています。

1) ^{ふきば}吹き場(^{かじば}鍛冶場)しごと

毎朝、石切の作業を始める前に石工は道具を手入れしなければなりません。「吹き場」と呼ばれる施設は採石場の近くに建てられた小さな鍛冶場で、そこでマサカリ、キリヌキなどの採石道具の刃先を手入れしました。

吹き場の内にはフイゴ、^ろ 炉、カナトコ、ミズタメ、カナヅチ、ヒバシなどが備えつけられており、一人で作業できるように^{こうりつてき} 効率的に配置されています。

石切場の朝は石工のたたく^{つち} 鑪^ねの音から始まりました。

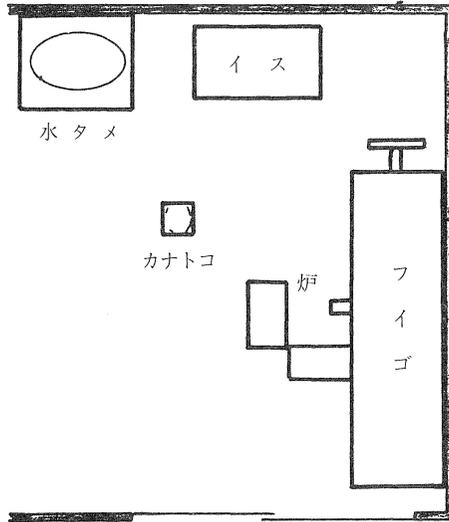


図1. 吹き場の配置図

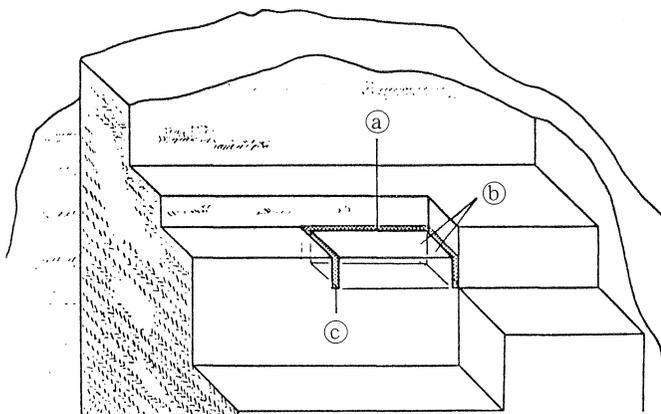


写真5. 吹き場

2) キリヌキ

石山から^{こうりつ}効率よく石を切りはなすための切り込み作業を「キリヌキ」といいます。

右の図で説明すると
①、②、③の溝を5寸幅（約15cm）で垂直に掘り込む作業のことです。 図2. キリヌキの模式図



特に①のように壁ぎわを掘るのを「シリツケ」、②のように隅の部分^{すみ}を掘るのを「イキズメ」といい、一段と高度な技術を要しました。

「キリヌキ」にはマサカリ、キリヌキマサカリ、キリヌキグワの三種類の道具を使います。



写真6. キリヌキ（昭和40年代）

マサカリは用途の広い道具ですが、柄の長さが2尺5寸ですので、「キリヌキ」の浅い溝を掘るときに使い、溝がやや深くなってくると深さに合ったキリヌキマサカリを使います。キリヌキマサカリには柄の長さが3尺（約90cm）、3尺5寸（約1.05m）、4尺（約1.2m）、4尺5寸（約1.35m）、5尺（約1.5m）と5種類あり、溝が深くなるにつれて長柄のものに

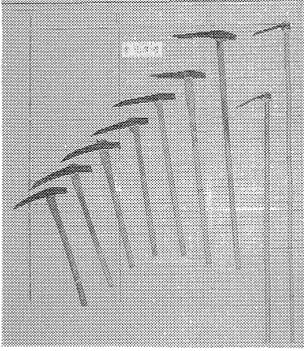


写真7. キリスキの道具

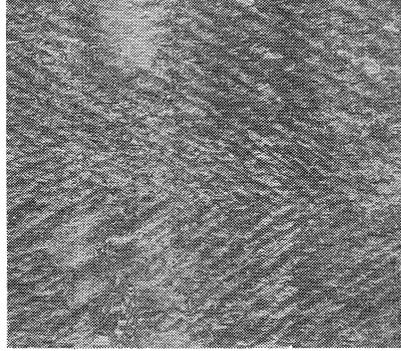


写真8. キリスキのあと

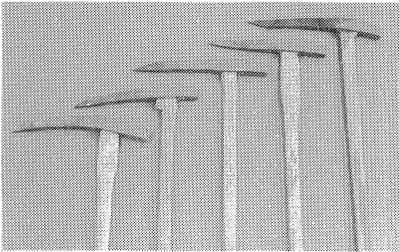


写真9. マサカリの刃先

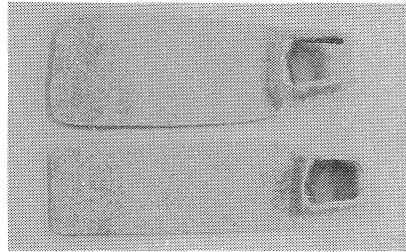


写真10. クワの刃先（上が短柄、下が長柄）

変えていきます。柄が長くなるにつれて深い溝が掘れるように刃先を
そ
反らせているのに先人の工夫がうかがえます。(写真9をみてください。)

今でも石切場に行くと壁面に斜めの筋をみかけますが、これがマサ
カリとキリスキマサカリの^{あと}痕です。

キリスキグワは溝の底にたまる石クズをすくう長柄のクワです。こ
れも深さによって大小2種類を使いわけますが、「キリスキ」の溝は
深くなるほど細くなるため、柄の短いクワ先は幅が広く、柄の長いク
ワ先は細くなっています。(写真10、資料2を見て下さい。)

「キリヌキ」の作業は石切場では最も高度な技術を要します。^{うで}腕が未熟だと溝が先細りになりすぎて深く掘れなくなるか、極端に幅広の溝を掘ってしまったようです。^{じゅくれんしや}熟練者にいわせると、山に響く「キリヌキ」の音を聞くだけで作業をしている石工の腕前がわかったそうで、一人前になるのに5年はかかったといえます。

3) イ シ ア ゲ

「キリヌキ」によって石の周囲は切り離されますが、底は石山にくっついたままです。この石をあげて底を切り離す作業を「イシアゲ」といいます。

手順としては、石の下部に高さ約10cmの溝を掘り〔アゲ切り〕、溝には約20cm間隔で小さな穴を掘り〔ヤイド掘り〕、そこにオオヤをすえます。そして

オオヤをゲンノウで打ち込み〔イシアゲ〕、石を石山から割り離します。(写真11を見てください。)

〔アゲ切り〕、〔ヤイド掘り〕にはマサカリ、〔イシアゲ〕にはマサカリ、オオヤ、ゲンノウ(大)を使います。

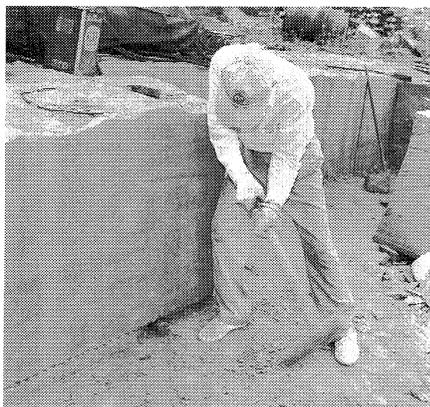


写真11. ゲンノウでヤを打ち込む

4) イ シ ワ リ

「キリヌキ」、「イシアゲ」によって石山から切り離された石は、一般的にタテ20～25尺（約6 m～7.5 m）、ヨコ8尺（約2.4 m）、高さ4～4.5尺（約1.2～1.4 m）の^{きよせき}巨石ですが、これを用途に応じて割る作業を「イシワリ」といいます。「イシワリ」には、その割り方によって〔オオワリ（ヨコワリ）、（ナガワリ）〕、〔トチュウアゲ〕、〔コワリ〕と呼ばれる段階があります。

〔オオワリ（ヨコワリ）、（ナガワリ）〕 下の図-1、-2のように切り出した石を横または縦方向に割る作業です。特に横に割るのをヨコワリ、縦に割るのをナガワリといいます。注文の石の寸法によって2つに割ったり、3つに割ったりしました。割りたい所に等間隔に

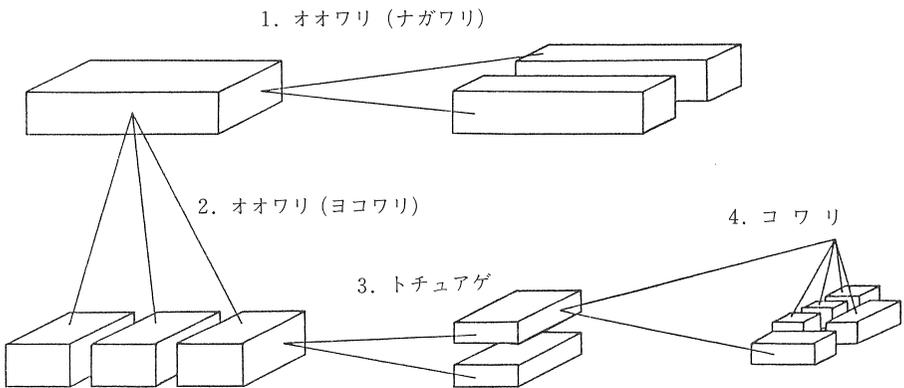


図3. イシワリの模式図

ヤイド（小さな穴）を掘り、オオヤをすえてゲンノウで順次割っていきます。ナガワリはヨコワリほど必要とされませんでした。

〔トチュウアゲ〕 図3-3のようにオオワリした石を上下に割る作業です。ただし、キリヌキが浅く、高さが低い場合にはトチュウアゲをしないこともありました。ヤはチュウヤを使いました。

〔コワリ〕 図3-4、写真12のように、小さくした石を製品の用途にあわせて半加工しやすいように割る作業です。コワリがすむと「キリイシ」作業に移ります。ヤはナガヤ、コヤを使いました。

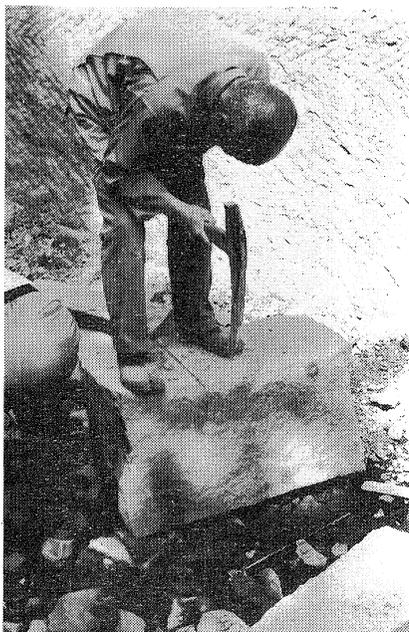
12
|
112
|
2

写真12. コワリ

1. スジ引き

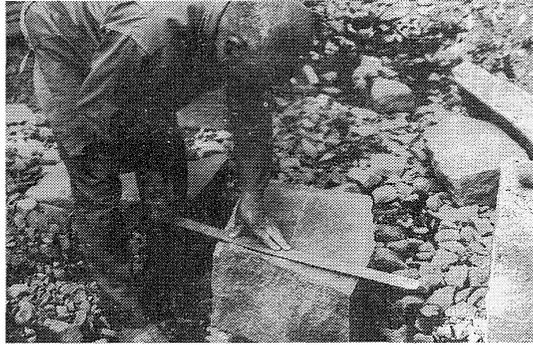
2. コヤを打ち込む

5) キリイシ

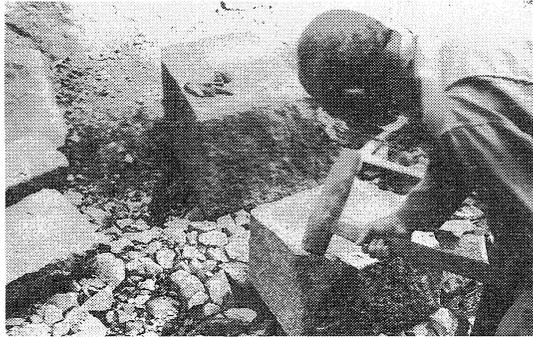
「イシワリ」で小さくした石を採石場の脇で半加工する作業を「キリイシ」といいます。

「キリイシ」をするのは、余分な部分を削り落して運搬しやすくするのと、加工場でできるだけ加工しやすくするためでした。

右の写真は昭和40年代の「キリイシ」風景です。上段は製品の寸法に合わせて、型をとるところ。中段は型にあわせての石の^{かたおと}肩落とし。下段はほぼ荒ケズリし終えた原石です。この石を加工場までひいていきました。



13
|
1



13
|
2



13
|
3

写真13. キリイシ

上段 寸法どり 中段 型にあわせての肩落とし

下段 荒ケズリされた原石

採石の手順と使う道具

作 業	道 具	
1) 吹き場 (鍛冶場) しごと (採石場で使う道具を) 手入れする	<ul style="list-style-type: none"> ファイゴ カナトコ ゲンノウ (小) ヒバサミ ミズタメ 	
2) キリヌキ (原石山から石を切り) はなすための切り込 みをする	<ul style="list-style-type: none"> マサカリ (2尺5寸) キリヌキマサカリ (3尺) (3尺5寸) (4尺) (4尺5寸) (5寸) 	
3) イシアゲ (石をあげて切りはな す)	<ul style="list-style-type: none"> アゲ切り ————— ヤイド掘り ————— イシアゲ ————— 	<ul style="list-style-type: none"> キリヌキグワ マサカリ マサカリ キリマサカリ オオヤ ゲンノウ (大) マサカリ
4) イシワリ (用途に応じて石を割 る)	<ul style="list-style-type: none"> オオワリ ————— (ナガワリ、ヨコ ワリ) トチュウアゲ ————— コワリ ————— 	<ul style="list-style-type: none"> オオヤ ゲンノウ (大) マサカリ チュウヤ ナガヤ ゲンノウ (大) ジョウギ ゲンノウ (小) ナガヤ コヤ
5) キリイシ (寸法に合わせて荒ケ) ズリをする	<ul style="list-style-type: none"> ジョウギ サシガネ スジヒキ ゲンノウ (小) キリマサカリ チョウノウ ツルハシ 	

3. 原石運搬の技術と道具(機械化以前)

今では道路が整備され、採石場から加工場までは運搬車で原石を運ぶようになりましたが、昭和40年代ごろまではネコグルマ、オイコ(主に女性)、木ゾリ、大八車だいはちぐるまなどを使って原石を運びました。

右の写真はネコグルマですが、これは平坦なところを運搬するのに使いました。



写真14. ネコグルマ

特に採石場で「イシワリ」によって小さくした原石を、採石場の脇にある「キリイシ(半加工)」作業場まで運ぶのに使



写真15. 木ゾリ

ました。

左の写真は木ゾリ(木馬)きんまで半加工製品を運んでいるところです。木ゾリは半加工製品を下の車道までの細い急斜面を運ぶときに使いました。

ソリの構造は木材を組み合わせて簡単かんにできています。ソリの前方には鉄のブレーキかわがついており、雪道や地面がぬれている時に使用し、乾くとはずしました。

4. 加工の技術と道具（機械化以前）

1) 来待石の加工

来待石の加工の歴史は古いのですが、特に江戸時代になると藩の統制の下で加工専門の業者が腕をみがきます。加工業者の多くは松江城下に住み、様々な石製品の需用に応じていきました。

出雲地方の寺社、とりわけ松江市内の寺社を歩くと江戸時代に造られた多くの来待石製品をみることができます。特に石灯籠、唐獅子、石仏などの細かい細工を必要とするものが目立ちます。これらの来待石作品群の存在は、江戸時代の出雲石造文化が来待石によって支えられていたことを雄弁にものがたっているといえましょう。

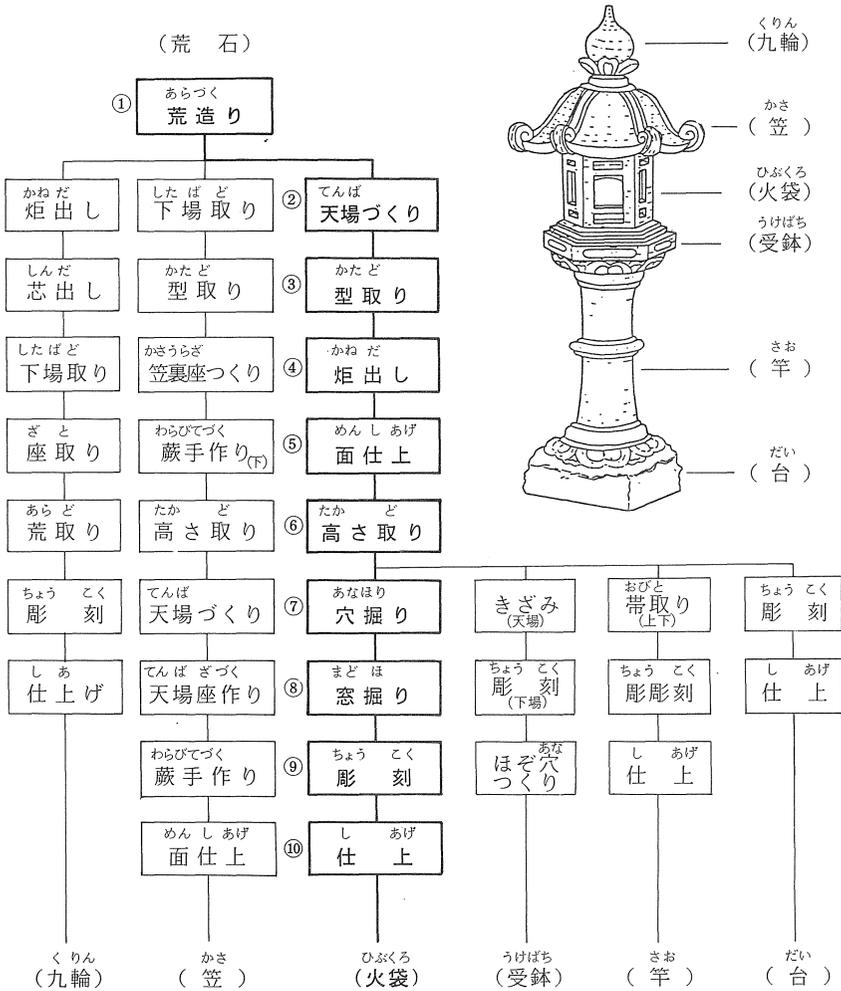
今でも出雲唐獅子、出雲石灯籠、とよばれる江戸時代の作品が全国各地にのこっていますが、これらは藩の許可を得て、出雲地方の特産品として移出されたものと考えられています。

来待石のように軟質で、きめの細かい石は風化しやすいという欠点はあるものの、彫刻技術を高めていくのに都合のよい石材だったでしょう。来待石の加工技術は城下町松江の石工の努力によって極度に高められていきます。

来待地区に再度、加工技術が入ってくるのは昭和時代になってからですが、この技術は江戸時代に城下町松江で生まれた高度な技術を受けついだものなのです。

ここでは来待石加工の技術と道具についてみていきましょう。

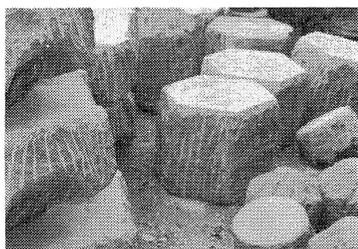
来待石灯ろう製造工程図 (春日形)



2) 春日灯ろうの製作工程

春日灯ろうは庭園などをかざる鑑賞用の灯ろうで、雪見形、織部形などとともに出雲石灯ろうの中でも代表的なものです。

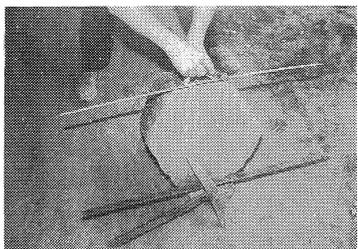
前頁の図のように、春日灯ろうは九輪、笠、火袋、受鉢、竿、台の組み合わせですが、この中で「火袋」は最も複雑で特殊な技術を要します。以下、手作業による「火袋」製作を順を追って見てみましょう。



① 荒石

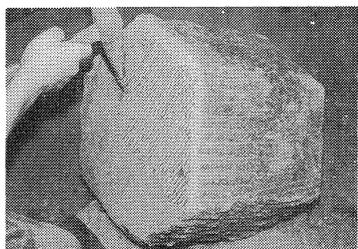
採石場で半加工した荒石を、加工場の脇においておきます。

写16-1

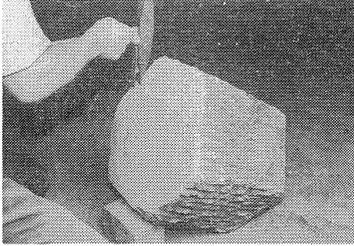


② 天場づくり〔スミ出し〕

荒石に矩回し（差金で計る）をおこない、定規をあてて墨つけ（線引き）をします。写16-2



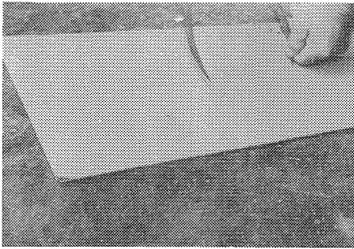
天場づくり〔三本ツメの荒落し〕
墨に合わせて天場（火袋の上面）を三本ツメのチョウノウで荒落しをします。写16-3



天場づくり〔チョウノウの仕上げケズリ〕

三本ツメで荒落しをした後、チョウノウできちんと削ります。

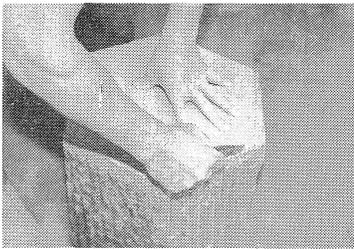
写16-4



③^{かたと}型取り〔型づくり〕

差金とコンパスで天場の型板をつくります。

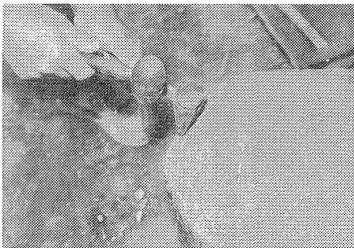
写16-5



型取り〔天場の墨つけ〕

型板に合わせて、ノミなどで墨つけ（線を引く）をします。

写16-6



④^{かおだ}炬出し〔肩落し〕

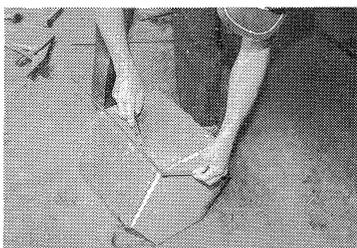
墨に合わせ、余分な肩をカタ落しで荒く大まかにたたき落します。

写16-7



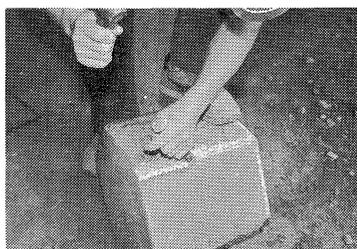
炬出し〔天場のノミ打ち〕

型取りでつけた墨にそって天場のノミ打ち（ノミで削る）をします。 写16-8



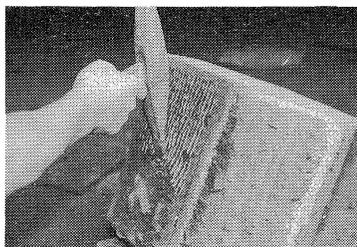
炬出し〔六角の墨つけ〕

天場を基準に差金をあてて、きれいな六角形ができるよう墨つけ（線を引く）をします。 写16-9



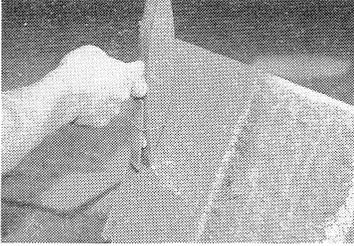
炬出し〔六角のノミ打ち〕

めんしあげ
面仕上がりがやりやすいように、六角の立ち角を墨にそって削ります。 写16-10



⑤ めんしあげ面仕上〔三本ツメの荒落し〕

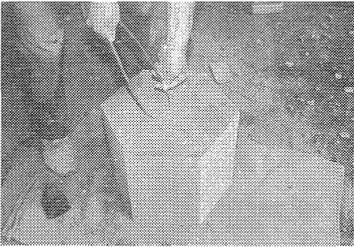
角部分のノミあとを基準にして、三本ツメのチョウノウで面の荒落しをします。 写16-11



面仕上〔チョウノウの仕上ケズリ〕

三本ヅメで荒落しした後をチョウノウできれいに削ります。

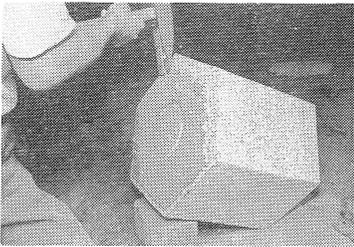
写16-12



⑥高さ取り〔ホゾ穴の墨つけ〕

差金で高さの墨つけをした後、火袋をひっくり返して、下場にホゾ穴の墨つけをします。

写16-13



高さ取り〔ケズリ〕

高さの墨（線）とホゾ穴の墨をもとに、火袋の高さを整えていきます。

写16-14



⑦穴掘り〔穴アカシの墨つけ〕

再び火袋をひっくり返し、天場に穴アカシ（火袋の中をくりぬく）の墨つけをします。

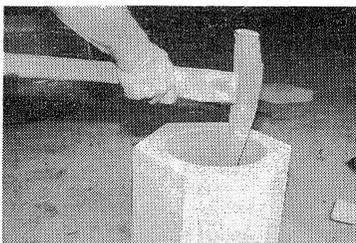
写16-15



穴掘り〔掘りはじめ〕

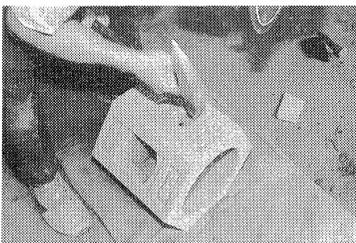
ツルハシを使い、穴アカシの墨にそって火袋の中をくりぬきます。

写16-16



穴掘り〔掘りおわり〕

穴が大きすぎぬよう、小さすぎぬようくりぬきます。 写16-17



⑧窓掘り

石面に差金で寸法どりをし、ノミ、小ヅチ、ツルハシを使い、窓を掘りぬきます。 写16-18



⑨彫刻・仕上

ノミ、小ヅチ、ツルハシなどで半月、満月、^{しか}鹿、^{もみじ}紅葉などを彫刻し、最後にツツキ、仕上ノミなどで仕上げます。 写16-19

3) 灯ろう作りに使う加工具

石灯ろうの加工だけでも多くの加工具を使用します。前項の「来待石の製作工程」では加工具の紹介があまりできませんでしたが「火袋製作」には以下の加工具を使用します。

①荒石

②天場づくり

定規、^{じょうぎ}差金、^{さしがね}ノミ、コヅチ、三本ヅメのチョウノウ、チョウノウ

③型取り

定規、差金、ノミ、コヅチ、コンパス

④炬出し

定規、差金、カタオトシ、ノミ、コヅチ、三本ヅメ、チョウノウ

⑤面仕上

定規、差金、ツルハシ、ノミ、コヅチ、三本ヅメ、チョウノウ、
ガンガン

⑥高さ取り

定規、差金、ノミ、ツルハシ、コヅチ、三本ヅメ、チョウノウ

⑦穴掘り

定規、差金、コンパス、ツルハシ、カタツルハシ、ノミ、コヅチ

⑧窓掘り

定規、差金、コンパス、ツルハシ、ノミ、コヅチ

⑨彫刻、仕上

定規、差金、コンパス、ノミ、コヅチ、ツツキ、スリミガキ

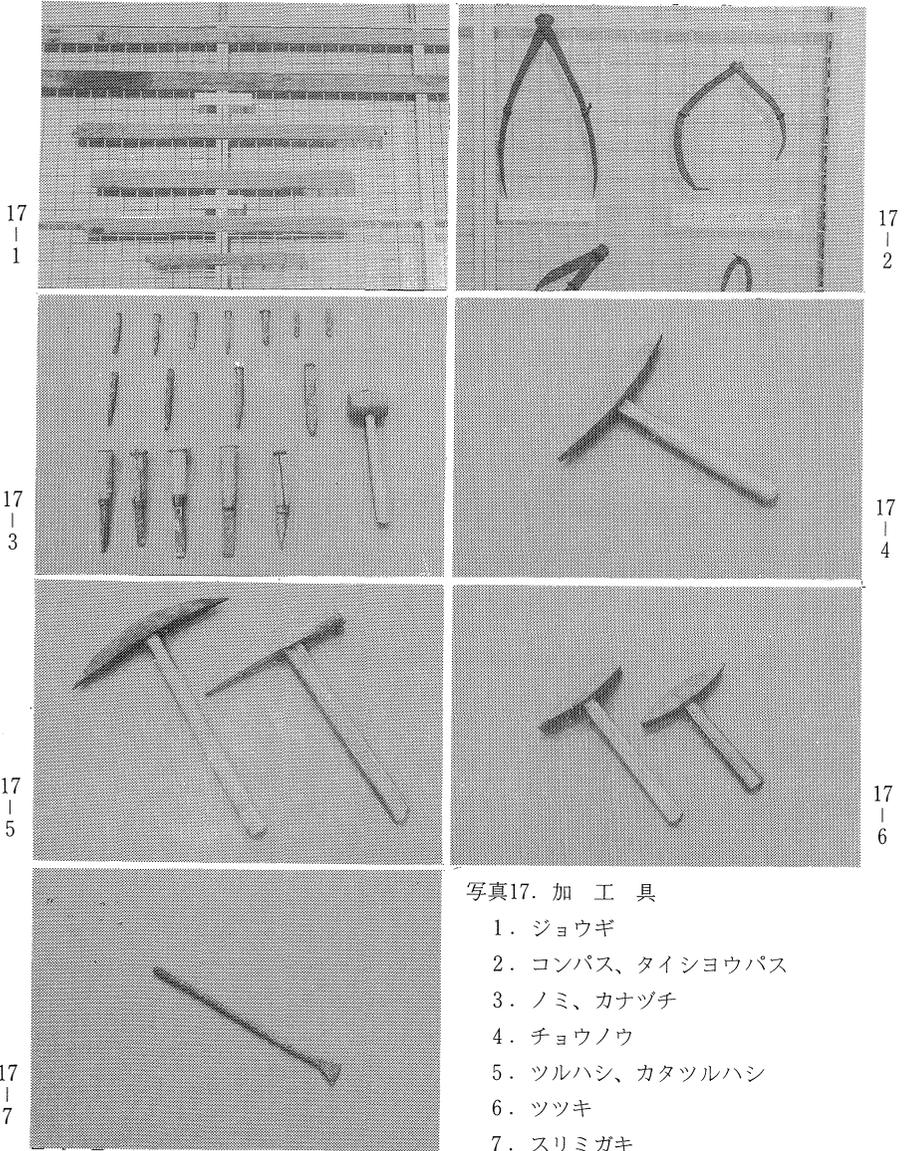


写真17. 加工具

1. ジョウギ
2. コンパス、タイシヨウパス
3. ノミ、カナヅチ
4. チョウノウ
5. ツルハシ、カタツルハシ
6. ツツキ
7. スリミガキ

5. 来待石の文化

来待石は古くから石材として用いられてきたため、それを利用した石造文化の残像が出雲地方を中心とする各地に残っています。しかし、来待石の風化しやすいという性質のために、多くの作品が石塵と帰してしまいました。ここでは現在かろうじて残っている来待石製品を数例紹介してみましよう。

1) 殿様墓宝篋印塔（三刀屋町給下）

三刀屋町給下の山すそに、地元で「殿さん墓」と称する古墓があります。これは2つの石室の中にそれぞれ来待石でできた宝篋印塔を2つ納めるものです。

塔はいずれも来待石製の1 m 20～30cmで、夫婦のものと推定されています。

風化がはげしく、銘文はほとんど残っていませんが、塔の一

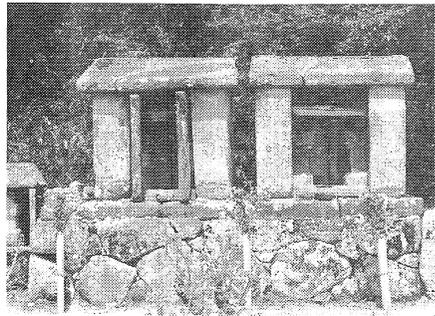


写真18. 殿 様 墓

部には「天福（1233～34年）」、「寛元（1246～47年）」と推定される文字が残っていたようですので、三刀屋城主となる諏訪部扶長（三刀屋氏初代）の墓とも考えられます。

2) 尼子清定・経久宝篋印塔（広瀬町広瀬）

清定、経久父子は月山富田城を拠城として尼子氏の勢力を広げていた戦国時代の武将です。

塔は父子並んでたてられており、向かって右側は清定塔で高さ1 m

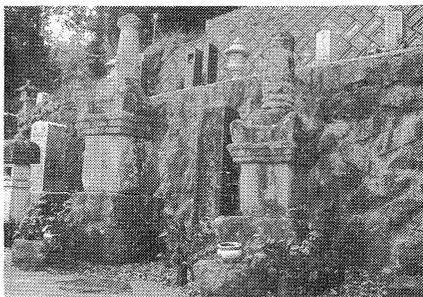


写真19. 尼子清定（右）、経久（左）の墓

67cm、左側は経久塔で高さ2 mです。いずれも来待石製の宝篋印塔で、相輪、笠、塔身、基壇からなっています。

塔の形態や、父子の没年代から、室町時代末から安土桃山時代初期の造立と考えられます。

3) 堀尾吉晴五輪塔

（広瀬町塩谷）

堀尾吉晴は戦国時代に生まれ、

信長、秀吉、家康と仕えました。

度重なる功により、関ヶ原の合

戦後、出雲の領主として富田城

に入り慶長16年（1611）、松江

城の築城を前に亡くなったため、富田（広瀬）巖倉寺に葬られます。

墓は、来待石製の五輪塔で高さ3 m 28cmをはかる巨大なものです。

前述の尼子清定、経久の墓と同様、江戸時代の初期までは、出雲の

領主層の墓には来待石が利用されていたことをよく示しています。

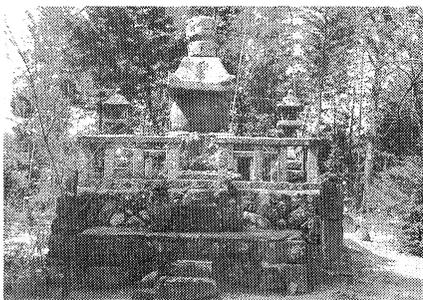


写真20. 堀尾吉晴五輪塔

4) 青柳楼の大灯籠 (別名お加代灯籠 松江市灘町)

この石灯籠はもと明治初期から松江の観楽地とし賑わった天満宮裏で、もっとも大きな料亭の一つ「青柳楼」(現在の市立病院付近)にあったものです。

当時その辺は宍道湖の波打ちぎわで高さ6mの来待石製大灯籠は入江の燈台の役目もしていました。

松江藩の危急を救った玄丹お加代の名をとって、「お加代灯籠」とも呼ばれています。

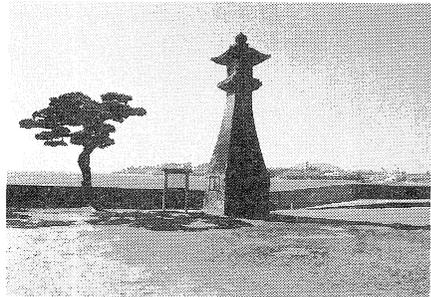


写真21. 青柳楼の大燈籠

5) 袖師ヶ浦の地藏さん

(松江市袖師町)

松江市袖師町の宍道湖岸に顔を西に向けた大小2つの地藏さんが立っておられます。水死者の菩提をとむらい、水難から守るために設けられたものです。

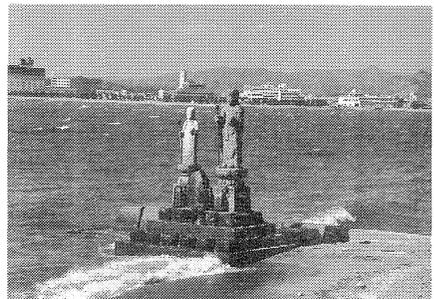


写真22. 袖師ヶ浦の地藏さん

正面向かって右の大きいものが来待石、小さいものが花崗岩でできています。台石には「弘化五年(1048)戊申仲秋吉祥日」「木次団野八兵衛祥恭作」とありますので、代々松江藩主の墓碑を作った木次の団野家の手によって製作されたことがわかります。

6) 出雲唐獅子

江戸時代、北前船きたまえせんを利用した海上交通の発達によって、来待石製の唐獅子からじし（出雲唐獅子と呼ばれた）が藩はんの許可を得て全国に広まってきました。京都伏見区藤森神社ふじもりにある文政3年（1820）銘めいの唐獅子を



写真23. 出雲唐獅子

はじめ山形、栃木、千葉、福井、兵庫、香川、山口、佐賀、長崎の各県で現在確認されています。

左の写真は山形県酒田市日和山公園ひよりやまにある唐獅子で、銘文はないものの、江戸時代中期のものと考えられています。

7) 木幡山荘吐月橋こわたさんそうとげつきょう（宍道町宍道）

木幡山荘は宍道町木幡家の庭園として代々を整備されてきたものですが、この園内に来待石で造られた石橋がかかっています。

橋の長さは約4 mで、両側に高さ50 cmらんかんの欄干らんかんがつけられています。橋脚きょうきゃくは両側から積み上げるようにして、反そりの深い橋面を作っています。江戸時代の製作ですが、現在も十分通用にたえられるほど精巧せいこうなものです。



写真24. 木幡山荘吐月橋

6. 地質からみた来待石

来待石は地質学上からみると、布志名層と呼ばれる礫層の下に広がる来待層の一部です。

来待層の主な分布は玉湯町布志名付近から斐川町学頭付近までの宍道湖南部の丘陵地と、出雲市栗原から湖陵下畑付近までの出雲平野南部の丘陵地に分かれており、他にも多伎町田儀から大田市朝山にかけても分布しています。

来待石は、この来待層の一部の通称で、宍道町来待を中心に、玉湯町林から西に約10km、幅約1～2kmの範囲で広がっています。

来待石を構成する砂岩は、来待層の下層である大森層中の安山岩が風化し、再び推積したものと考えられ、学名で粗粒擬灰質砂岩と呼ばれています。片岩、斜長石、輝石、沸石、粘土鉱物から構成されており、堆積面（石の層）は北西に向かってやや傾斜しています。

石は切り出した時は暗青色ですが、雨露にさらすと来待石らしい灰褐色となります。また時には厚さ数cmの暗褐色の泥土を挟むこともあります。この部分は非常にもろく、石材には利用できません。

来待石は堆積岩ですので、その中に化石を含んでいることでも知られています。その中には宍道町大字東来待字鏡地区で最初に発見されたカガミアヌス（ホタテ貝の一種）や水陸両用の珍獣デスマスチルス、パレオパラドキシアなどの貴重な化石も含まれていました。

7. お わ り に

来待石にかかわる^{せいぎょう}生業は古くからおこなわれており、現在でも重要な地場産業として位置づけられています。

しかし、出雲地方を代表する^{でんとうてきさんぎょう}伝統的産業であるにもかかわらず、来待石の採石・加工技術についてはあまり知られておらず、その歴史について語る資料もほとんどないという状況が長く続いていました。

このようななかで^{さいわ}幸い、昭和61年にオープンした宍道町菟古館では来待石の採石・加工具の展示ができましたし、今回のふるさと文庫ではそれを補う形で資料を整理することができました。

本書にとりあげた採石・加工技術に関する記述の多くは実際に石山、加工場で働いた^{たいけんたん}経験のある方の体験談をもとにしていますので、大正時代末期から昭和時代全般にわたっての内容が中心となっています。

資料の制約で体験談に語られる以前の^{でんしょう}技術は^{ぶんけん}伝承、文献からの引用などによらざるを得ませんでした。しかし、他の生産様式の多くがそうであるように、昭和40年代に始まる機械化以前の技術の基本は^{ちゅうせい きんせい}中世、^{けいしやう}近世から^{いき}継承されてきた、息の長いものと考えています。

来待石の^{せきぞうぶん}石造文化は出雲の石造文化といっても^{かごん}過言ではなく、今後も来待石に^{かか}関わる^{けんしやう}様々な文化を^か顕彰していく必要がでてくるでしょう。

最後になりましたが、本書の作成にあたっては下記の方々に特に御指導をいただきました。深く感謝申し上げます。

勝部正郊〔調査指導〕、武田忠一、勝田幸〔採石〕、藤原良雄、勝部勝義〔加工〕（敬称略）

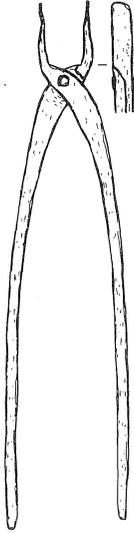
（本書の執筆、編集は教育委員会事務局の協力をえて、稲田 信がおこなった。）

8. 資 料 編

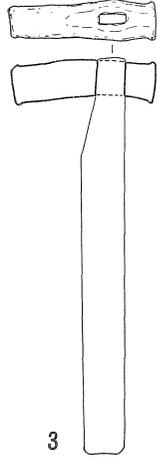
資料 1. 吹き場の道具



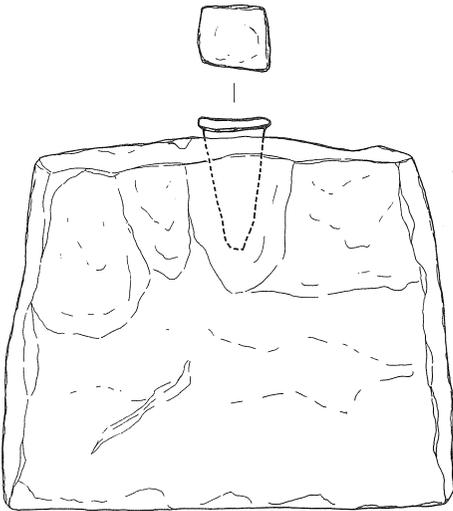
1



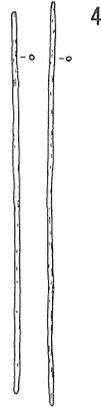
2



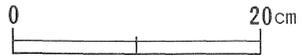
3



5

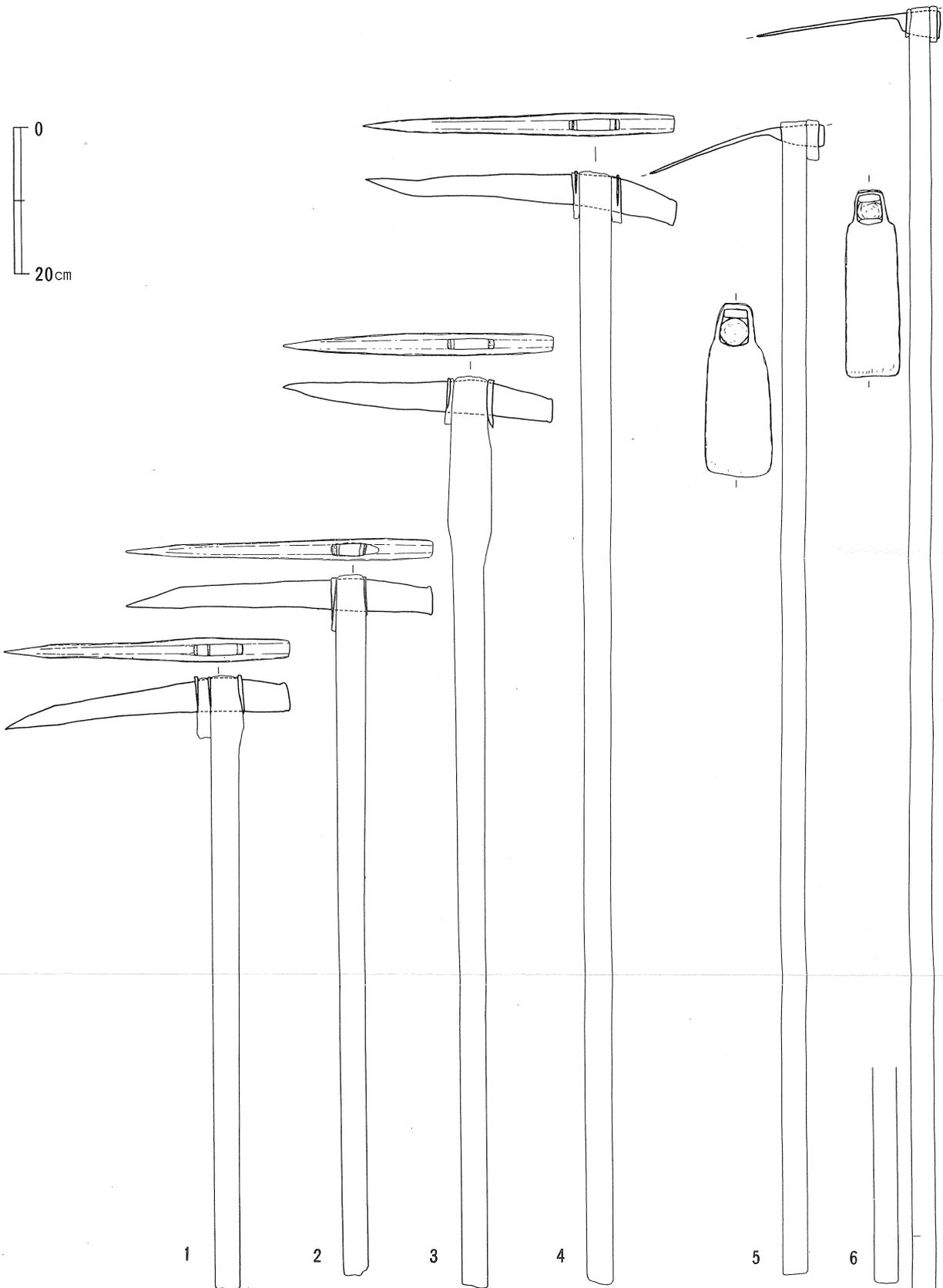


4



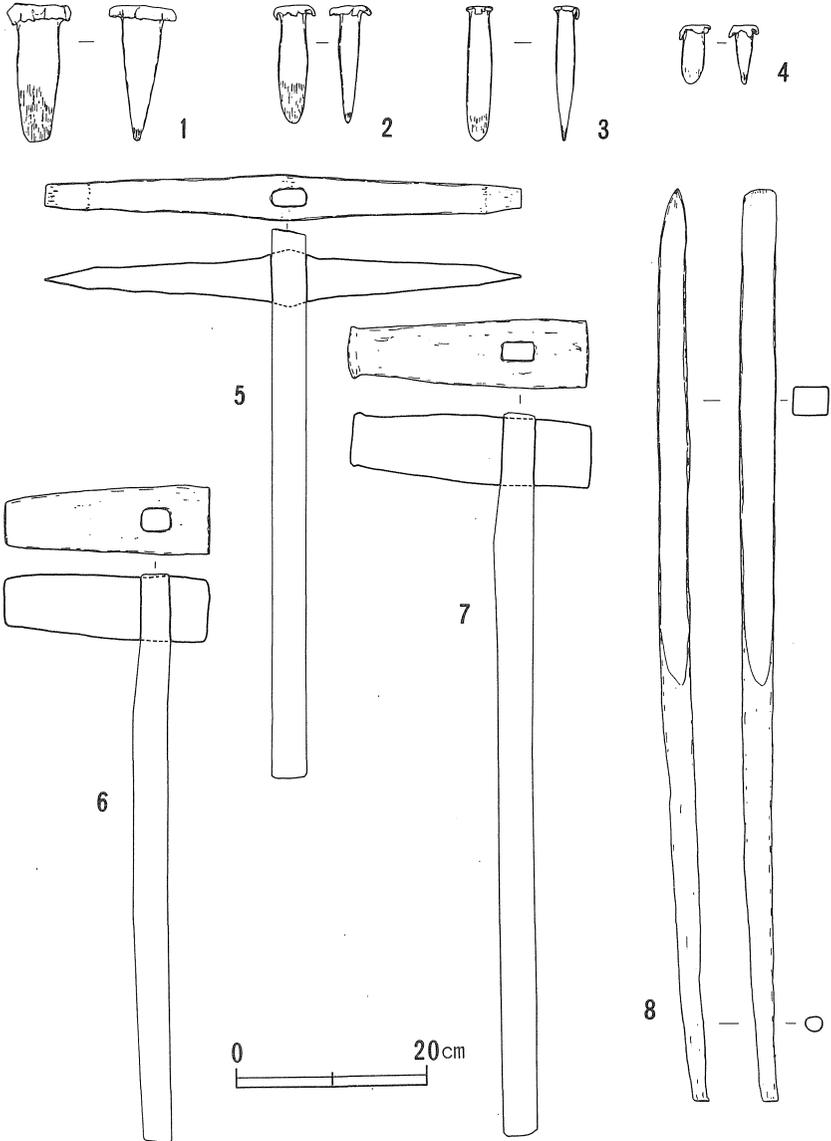
1. ヒバサミ (小) 2. ヒバサミ (大) 3. カナヅチ 4. ヒバシ
5. カナトコ

資料 2. 採石場の道具 (1)



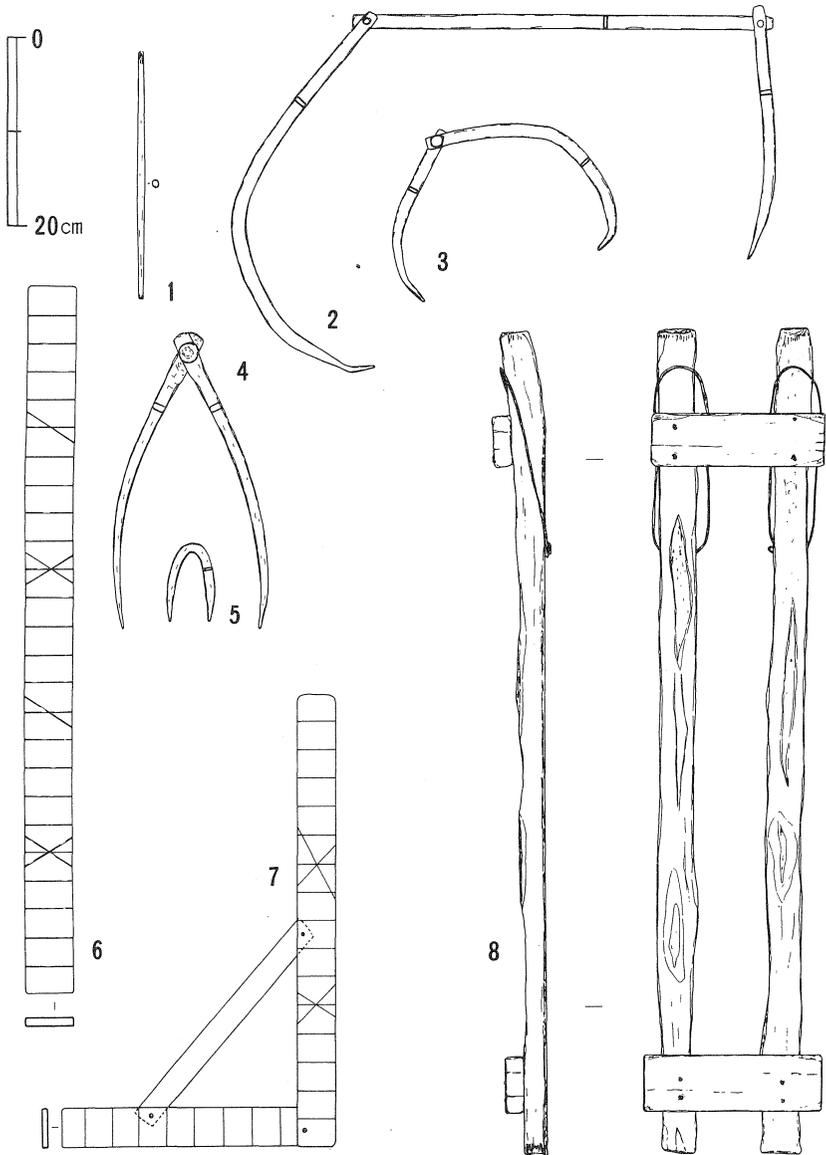
1. マサカリ (2尺5寸柄) 2. キリヌキマサカリ (3尺柄)
3. キリヌキマサカリ (4尺柄) 4. キリヌキマサカリ (5尺柄)
5. キリヌキグワ (小) 6. キリヌキクワ (大)

資料3. 採石場の道具(2)



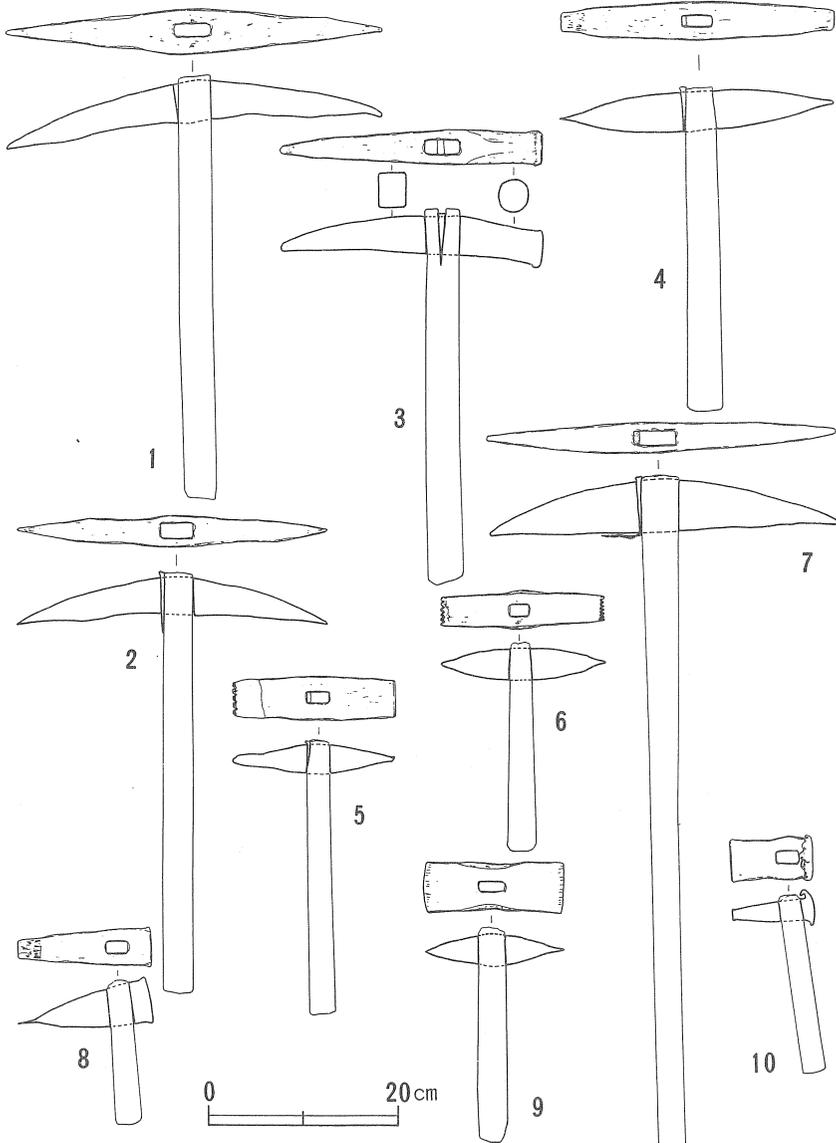
- 1. オオヤ 2. チュウヤ 3. ナガヤ 4. コヤ (マメヤ)
- 5. チョウノウ 6. ゲンノウ (小) 7. ゲンノウ (大)
- 8. カナテコ

資料4. 墨つけ（線引き）と運搬の道具



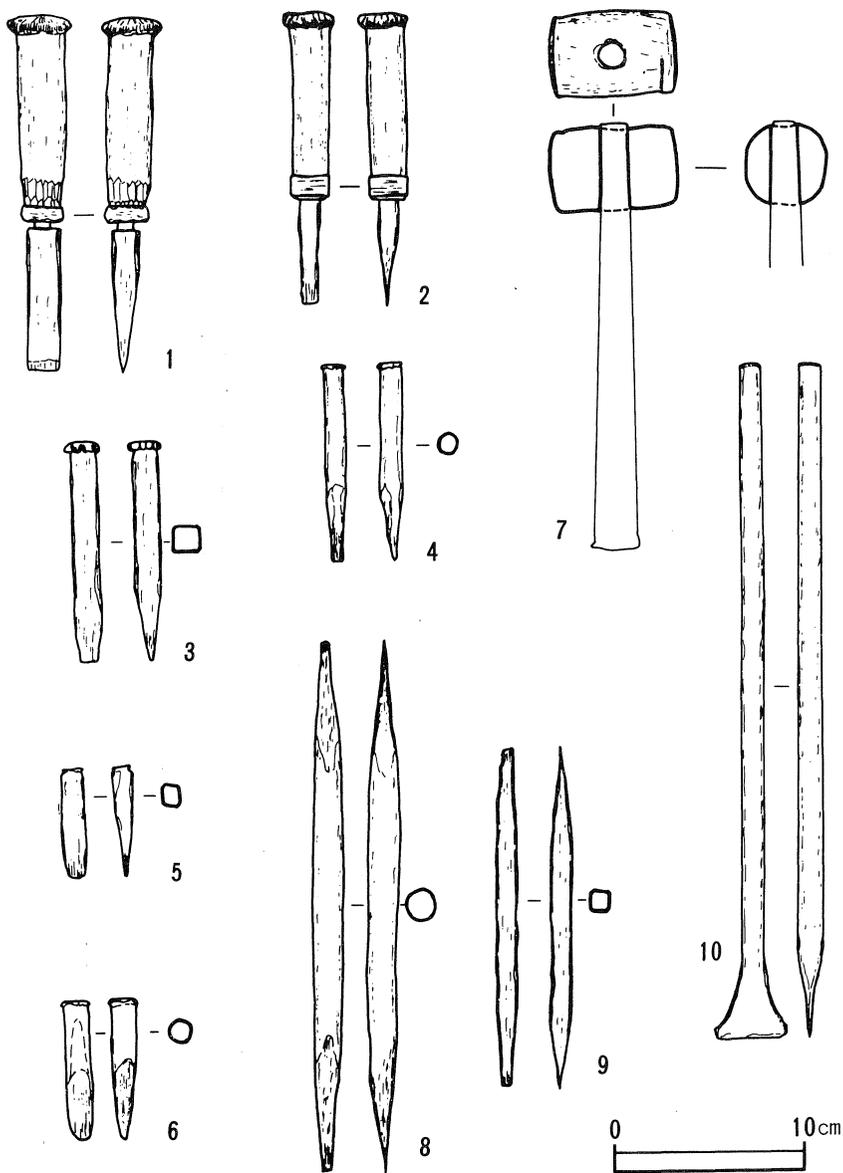
1. スジヒキ 2. タイショウパス (大) 3. タイショウパス (小)
 4. コンパス (大) 5. コンパス (小) 6. ジョウギ 7. サシガネ
 8. キゾリ (キンマ)

資料5. 加工の道具(1)



- 1. ツルハシ (大) 2. ツルハシ (小) 3. カタツルハシ
- 4. チョウノウ 5. ツツキ (小) 6. ツツキ (小)
- 7. ツツキ (大) 8. ウスチョウノウ 9. タタキ 10. カタオトシ

資料 6. 加工の道具 (2)



1. ノミ(大) 2. ノミ(小) 3. コヤ 4. コヤ 5. マメヤ 6. マメヤ
7. カナヅチ 8. ジホリノミ 9. ジホリノミ 10. スリミガキ

資料7. 特殊な工具の説明

名 称	説 明	備 考
カ ナ ト コ	吹き場で、道具を修理するのに使う。カナトコの上で、道具をカナヅチで打ち込む。	資料1-5 図1、写真5
マ サ カ リ	溝や穴を掘るのに使用。本文「キリスキ」参照。	資料2-1
キ リ ス キ マ サ カ リ	「キリスキ」の時に溝を掘るのに使用。本文「キリスキ」参照。	資料2-2、3、4
キリスキグワ	「キリスキ」の溝の底にたまった石クズをさらう。本文「キリスキ」参照。	資料2-5、6
チ ョ ウ ノ ウ (採石場用)	採石場での半加工に使う。スジ引きをしたり、不用な部分を打ち落とす。	資料3-5
カ ナ テ コ	採石場で石を起こしたり、倒したりするのに使用。	資料3-8
ス ジ `ヒ キ	割ったり、加工したりする前に下線を引いておくのに使用。	資料4-1
タイショウパス	半加工、加工の時に使うコンパス。大正時代に考案されたので、この名が付く。	資料4-2、3
ジ ョ ウ ギ、 サ シ ガ ネ	半加工、加工に使う。舟の口(赤樫の木)の古材を使うため、くるいが少ない。	資料4-6、7 写真13-1
ツ ル ハ シ	加工場で荒落とし、穴掘りする時に使う。刃が片方にあるのを片ツルハシという。	資料5-1、2、3 写真16-16、17、18
チ ョ ウ ノ ウ (加工用)	荒面をきれいに削り整えるのに使う。刃先は幅約2cmで、厚さ約2mm。	資料5-4 写真16-4、12
ツ ツ キ	チョウノウを用いたあとのツツキ仕上げに使用し、きめ細かな石面に仕上げるために、目ぞろいにつつく。	資料5-5、6、7
ウスジョウノウ	モチツキウスの中を磨きあげるのに使用	資料5-8
タ タ キ	刃先の幅約5cm、厚さ約5mmで、石面に横筋のできるタタキ仕上げに使用。	資料5-9
カ タ オ ト シ	「肩落とし」の意味で、スジ引きした不用部分を打ち落とす。ノミを併用する。	資料5-10 写真16-7
ジ ホ リ ノ ミ	字や細かい細工を彫るのに使用。	資料6-8、9
ス リ ミ ガ キ	仕上げのときに、面や角を磨きあげる。	資料6-10

資料 8. 江戸時代の石工資料

これは江戸時代から松江で石屋を営んでいた石谷家第七代為七関係の文書で、松江藩から為七に与えられたものです。松江藩が石加工職人を統制していたことがうかがえます。(伊藤菊之介『出雲の石造文化』参考)

<p>覚 石切 棟梁 為七 其方病氣依頼棟梁役差免び 年 来実可相勤候に付棟梁格申付く 未十二月五日御作事所(安政 六年)〔一八五九年〕</p>	<p>覚 寺町 肝煎 為七 右棟梁申付く 亥十月廿六日 (天保十年) 〔一八三九年〕</p>	<p>覚 寺町 石切 為七 右肝煎役申付く 未十二月廿一日(天保六年) 〔一八三五年〕</p>
<p>覚 鳥目五百匁棟梁為七 右末次権現御修復御用 格別骨折相働候二付 褒美遣元 十月二十八日</p>	<p>覚 鳥目五百匁棟梁為七 右御立山推恵社御修復 格別骨折相働候二付褒 美として遣元 十月二十八日</p>	

資料9. 松江藩が移出を禁じた商品

文化五年（一八〇七年）松江藩が出雲と石見の境である田儀にて他国へ移出を禁じた商品は次のとおりで、この中に来待石が含まれています。

他国出し御停止之品

- 一、米、大小豆 新穀並に粉糠共
- 一、酒、醬油
- 一、胡麻油、油單類
- 一、鉛並鹽硝
- 一、木竹、板類
- 一、炭、紙品々楮共
- 一、来待石、大根島石、大海崎石
- 一、諸鳥、 但御殺生方判鑑引合可_レ被_レ相通_一
- 一、た葉粉 松江より他國出しの分は御用所切手を以、且郷中より他國出致候分は郡役人切手を以改可_レ被_レ相通_二通事_一。
- 一、核苧、荒苧共 右同斷
- 一、牛馬 但郡役人切手を以改可_二相通_一候。
- 一、繰棉 常平方切手を以改可_レ通事。



- 一、木綿 但寺社修理方切手を以改可_二相通_一事。
- 一、襖類 實綿 綿實共に
- 一、蠟
- 一、疊表 疊共 縁取 縁布 但小呉産、縁取は松江清水榮左衛門切手を以改可_レ被_レ通候。
- 一、漆、ある、煎茶、鹽
- 一、鳥臼木實、漆實 但他國出は勿論、下にも賣買不_二相成_一事。
- 一、古手衣類 但兩町古手屋判鑑引合可_二相通_一事。
- 一、鍋釜 但釜甌方切手を以改可_レ相通_一
- 一、鹿皮並牛馬皮 但郡役人切手を以可_二相改通_一事
- 一、粉鐵並に鐵 但寺社修理方切手を以改可_レ通事。
- 一、鐵並に唐金、眞鍮、並に同共
- 一、瓦
- 一、明表、繩、薦 但一荷以上不_レ若
- 一、當國菜種

（次、ページへ）

(前、ページより)

一、櫃、長持、箆筒、荷物並樽共 但仕出物は
差免候間内を令_レ吟味_レ不_レ苦空物之分可_レ相通

一、石炭並蛻貝共

御國へ入候儀御免之品

一、牛馬、漆、綿實。

一、備後 七島、琉球表、ある。

一、藍 但松江藍玉屋問屋切手相添可_レ被_レ相通

一、醬油、煎茶、茶ノ花、鹽。

一、胡麻、明シ油、油單、油槽。

一、諸魚、たば粉、核苧、荒苧。

一、肥前 伊萬里出し焼物染付並に青磁大白但 松

江舟持當切手相添可_レ被_レ相通候。

一、隠州物 但隠州宿へ切手相添可_レ被_レ相通候

一、石州紙 但他國へ入候儀、明和五子年より暫内

より内被_レ差留_レ候

一、諸鳥 但鳥座切手相添可_レ被_レ通

一、唐物 但長崎表買入相五ヶ所糸割賦宿差手板證

文を以罷通る分は印鑑に突台改可_レ被_レ相通_一尤三ヶ

年至手板或は削張之所有_レ之歟、継手印形無_レ之手

板は不正物に准_レ候事

一、他國瓦 是迄之通改可_レ被_レ通候

一、古手衣類 同 斷

一、大廻し商賣荷物 但極合通問屋より送り注文

を以相改可_レ被_レ通事

一、他國御免商人荷物 南部さらしや藤五郎、大

坂鍵屋利兵衛、同所目鑑屋伊兵衛、同所とうふや

喜兵衛、岩國綿屋九右衛門、文助、

一、こんにやく屋櫃之實茸類

一、箕、千把扱、柳こりり、砥石、木履類、和

藥種類

一、板軒、竹木、曾木、杉皮類

一、薪

一、鍋釜、唐紙、銅物類

右之品々御國へ入候儀被_レ差免_一此外何色之物にて
も御制禁に候。萬一不吟味之族も於_レ有_レ之は可_レ
為_レ越度_一旨に候篠、能々可_レ被_レ相改_一者也。

文化五辰十月(一八〇七年)

(簸川郡口田儀村河上昌之助藏懐中萬覺帳)

『松江市誌』より

資料10. 宍道町収蔵 採石加工具一覧

番号	名称	材料	製作年代	備考	番号	名称	材料	製作年代	備考
1	マサカリ	鉄、櫛		採石、半加工13	38	オオヤ	鉄		採石、半加工55
2	〃	〃		〃 14	39	〃	〃		〃 56
3	オイコ(モッコ)	ワラ		運搬 15	40	〃	〃		〃 57
4	ゲンノウ	鉄		採石、半加工16	41	〃	〃		〃 58
5	オオヤ	〃		〃 17	42	〃	〃		〃 59
6	〃	〃		〃 18	43	〃	〃		〃 60
7	〃	〃		〃 19	44	〃	〃		〃 61
8	〃	〃		〃 20	45	〃	〃		〃 62
9	コヤ	〃		半加工 21	46	〃	〃		〃 63
10	ジョウギ(2.5尺)	櫛		半加工、加工27	47	〃	〃		〃 64
11	〃 (5尺)	〃	明治末期	〃 28	48	〃	〃		〃 65
12	サシガネ	〃	大正	〃 29	49	カナテコ	〃	明治中期	吹き場 66
13	チョウノウ	鉄、櫛	明治初期	採石、半加工30	50	フィゴ	木	明治末期	〃 67
14	マサカリ	〃	〃	採石、半加工31	51	〃	〃	〃	〃 68
15	〃	〃	〃	〃 32	52	カナヅチ	鉄、櫛	〃	〃 69
16	〃	〃	明治中期	〃 33	53	ヒバサミ	鉄	大正年代	〃 70
17	キリスキマサカリ	〃	〃	3尺柄、採石34	54	キンリョウ	石、木		71
18	〃	〃	〃	3.5尺柄、〃 35	55	オモリ	石		72
19	〃	〃	〃	4尺柄、〃 36	56	〃	石		運搬 73
20	〃	〃	〃	5尺柄、〃 37	57	木ゾリ	木、鉄	昭和40年頃	〃 74
21	キリスキグワ(大)	鉄、竹	明治初期	採石 38	58	ネコグルマ	木	昭和初期	〃 75
22	〃 (小)	〃	昭和15年頃	〃 39	59	ネコグルマ車輪	木	〃	〃 76
23	ゲンノウ(大)	鉄、櫛	明治中期	採石、半加工40	60	〃	鉄		〃 77
24	〃 (小)	〃		〃 41	61	カナトコ	鉄、石	昭和初期	吹き場 78
25	〃 (大)	〃	明治中～末	〃 42	62	ジョウギ	櫛		半加工、加工79
26	コヤ	鉄	大正年代	〃 43	63	スジヒキ	鉄		〃 80
27	〃	〃	〃	〃 44	64	ゲンノウ	鉄、櫛		採石、半加工81
28	〃	〃	〃	〃 45	65	カタツルハシ	〃		加工 82
29	ナガヤ	〃	〃	〃 46	66	カタオトシ	〃		〃 83
30	〃	〃	〃	〃 47	67	〃	〃		〃 84
31	チュウギ	〃	明治末期	〃 48	68	コヅチ	〃		〃 85
32	〃	〃	〃	〃 49	69	ノミ(大)	鉄		〃 86
33	オオヤ	〃	〃	〃 50	70	ツルハシ	鉄、櫛		〃 87
34	〃	〃	〃	〃 51	71	〃	〃		〃 88
35	〃	〃	〃	〃 52	72	ゴボンヅメ	〃		〃 89
36	〃	〃	〃	〃 53	73	ジョウギ(2尺5寸)	櫛	昭和初期	半加工、加工91
37	〃	〃	〃	〃 54	74	サシガネ	鉄	大正末期	〃 92

番号	名 称	材料	製作年代	備 考	番号	名 称	材料	製作年代	備 考		
75	コンパス(大)	鉄	昭和20年頃	半加工、加工	93	114	マメヤ	鉄		半加工、加工	132
76	〃(中)	〃	〃	〃	94	115	〃	〃		〃	133
77	〃(小)	〃	〃	〃	95	116	〃	〃		〃	134
78	タイショウバス(大)	〃	大正中頃	〃	96	117	〃	〃		〃	135
79	〃(大)	〃	昭和初期	〃	97	118	〃	〃		〃	136
80	〃(中)	〃	昭和30年頃	〃	98	119	〃	〃		〃	137
81	〃(小)	〃	昭和20年頃	〃	99	120	〃	〃		〃	138
82	サンガネ	〃	昭和10年頃	〃	100	121	〃	〃		〃	139
83	〃	樫	〃	〃	101	122	〃	〃		〃	140
84	ナガジョウギ	〃	昭和20年頃	〃	102	123	〃	〃		〃	141
85	サンガネ	〃	昭和初期	〃	103	124	〃	〃		〃	142
86	ジョウギ	〃	〃	〃	104	125	チュウノミ	〃		加 工	143
87	ツツキ	鉄	〃	加 工	105	126	〃	〃		〃	144
88	〃	〃	〃	〃	106	127	コノミ	〃		〃	145
89	タタキ	〃	〃	〃	107	128	〃	〃		〃	146
90	ジホリノミ	〃	〃	〃	108	129	〃	〃		〃	147
91	〃	〃	〃	〃	109	130	マルノミ	鉄、木	昭和初期	加 工	148
92	〃	〃	〃	〃	110	131	〃	〃	〃	〃	149
93	〃	〃	〃	〃	111	132	〃	〃	〃	〃	150
94	〃	〃	〃	〃	112	133	ウスヂョウノウ	〃	昭和20年代	〃	151
95	〃	〃	〃	〃	113	134	スリミガキ	〃	〃	〃	152
96	〃	〃	〃	〃	114	135	ムナイシガタ	木	〃	〃	153
97	〃	〃	〃	〃	115	136	〃	〃	〃	〃	154
98	〃	〃	〃	〃	116	137	〃	〃	〃	〃	155
99	〃	〃	〃	〃	117	138	〃	〃	〃	〃	156
100	〃	〃	〃	〃	118	139	スミツボ	〃	〃	〃	157
101	〃	〃	〃	〃	119	140	カドスリ	石	〃	〃	158
102	アナクリノミ	〃	〃	〃	120	141	ミズミガキトイシ	石	〃	〃	159
103	コヤ	〃	〃	半加工、加工	121	142	エスキ	鉄	〃	〃	160
104	〃	〃	〃	〃	122	143	ヒバサミ(大)	〃	〃	吹き場	161
105	〃	〃	〃	〃	123	144	〃(小)	〃	〃	〃	162
106	〃	〃	〃	〃	124	145	ヒバシ	〃	〃	〃	163
107	〃	〃	〃	〃	125	146	カナトコ	木、鉄	〃	〃	164
108	マメヤ	〃	〃	〃	126	147	フィゴ	木	〃	〃	166
109	〃	〃	〃	〃	127	148	ノミの柄	〃	〃	加 工	167
110	〃	〃	〃	〃	128	149	〃	〃	〃	〃	168
111	〃	〃	〃	〃	129	150	チョウノウ	鉄、樫	〃	〃	169
112	〃	〃	〃	〃	130	151	カサガネ	鉄	〃	〃	170
113	〃	〃	〃	〃	131						

注) 備考中の「採石」は原石山から切り離すための道具。「半加工」は石を細かくするための道具。「加工」は加工場での加工具。番号は民具整理番号。

主な参考図書

宍道町誌	宍道町
松江市誌	松江市
出雲の石造文化	伊藤菊之助
続出雲の石造文化	〃
島根の石造文化	〃
狛犬をさがして	高橋万平
「原石豊富な石灯ろう」	本藤武功
島根県大百科事典	山陰中央新報社
島根県の地質	島根県

宍道湖ふるさと文庫 3

来待石の採石と加工

1990年3月31日 第一刷発行

2002年2月31日 第五刷発行

発行 宍道町教育委員会
八束郡宍道町大字昭和1番地

印刷 柏木印刷株式会社
松江市国屋町452-2

